

スウェーデンの高校教育とインクルーシブ教育

—— ダーラナ県の総合制高校特別教育プログラム・特別高校の調査から ——

高橋 智^{*1}・田部 絢子^{*2}・石川 衣紀^{*3}・内藤 千尋^{*4}
石井 智也^{*5}・能田 昂^{*6}・柴田 真緒^{*7}

特別ニーズ教育分野

(2017年9月26日受理)

1. はじめに

現代の急激な社会構造の変化や家庭の経済的格差や養育困難の拡大、子どもの迷い・失敗などの試行錯誤を待てない社会の非寛容さや学校の厳しい管理統制のもとで、子どもは日々、多様な不安・緊張・抑うつ・ストレスを抱えながら現代を生きている。そうした不安・緊張・抑うつ・ストレスが複雑に絡み合い、自律神経失調・心身症、自殺、不登校・ひきこもり・中途退学などの心身の発達困難、いじめ・暴力・被虐待、触法・非行などの多様な不適応を有する子どもも少なくない(小野川ほか:2016)。

とりわけ高校段階の子どもは、対人関係はもとより、進学や就職という進路面に強い不安を感じている。竹本ほか(2016)が「多様な困難を抱える高校」において、在学中に発達障害や被虐待、心理的不安定等を有した卒業生に対して聞き取り調査を実施したが、そのなかで「本当は学校に行きたかった。アルバイト先での賄い飯を食べるために、学校よりもアルバイト先を選んだ」等の声が挙げられていることを指摘した。在学中において顕著な生活困難を抱えているために、学業にしっかり取り組むことや、将来について考える機会がなかったことが明らかにされている。

こうした現状から、進学・就職に必要な能力を高めることにとどまらず、生徒が自分の将来や生き方・職業を検討しながら自立・社会参加をめざしていく高校教育システムを保障していくことが求められている。

2016年に文部科学省は「高等学校における通級による指導の制度化及び充実方策」を報告し、小・中学校等においては連続した多様な「学びの場」が整備されているのに対し、中学校卒業後の進学先は主として高校と特別支援学校高等部に限られているという点を指摘し、高校においても「特別な教育課程」を用意し、生徒一人ひとりの教育的ニーズに即した支援が提供されるべきだとしている。こうした施策は高校段階における特別支援教育を整備する側面を持ちつつも、高校教育におけるさらなる能力主義的再編・強化を招く可能性もある(宋ほか:2014, 高橋:2017a, 2017b)。

従来、高校は地域の状況や生徒の現状をふまえ、限られた資源のなかでも、学習意欲や基本的生活習慣、不適応、発達上の困難等の多様な課題を抱えた生徒のインクルーシブな学習保障に多面的に取り組んできたが(竹本・安田・高橋:2014)、高校における「特別な教育課程」の整備が、こうした「インクルーシブな特別配慮の取り組み」の排除に繋がるのではないかという危惧もある。

*1 東京学芸大学 特別支援科学講座 特別ニーズ教育分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

*2 大阪体育大学 教育学部准教授, 東京学芸大学 非常勤講師

*3 長崎大学 教育学部准教授 (852-8521 長崎市文教町 1-14)

*4 松本大学 教育学部専任講師, 東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科博士課程 発達支援講座

*5 日本福祉大学 スポーツ科学部助教, 東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科博士課程 発達支援講座

*6 白梅学園大学 子ども学部助教, 東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科博士課程 発達支援講座

*7 東京学芸大学大学院 教育学研究科修士課程 特別支援教育専攻, 埼玉県立所沢特別支援学校

さて、このような問題意識からスウェーデンの高校教育に目を向けると、多様な分野の専門・職業教育が重視される一方で、平等な学校教育が社会統合や平等な社会の実現につながるという考えもあり、各専門性の深化と全体での共通性が深められてきている。高校段階において職業教育と大学進学プログラムが分れるが、就職先での経験を踏まえて大学進学を検討することが可能であり、職業教育プログラムについても一般科目のなかに職業に関する専門科目を取り入れ、長期間にわたる現場実習などにより専門性の強化がなされている(本所：2016)。

こうした教育保障の基本理念として、どのような学力の状態でも多様な補償教育プログラムを通じて本人の学習のつまずきの要点を明らかにし、それを克服できる機会が高校教育の場で与えられている。たとえば基礎学校の最終学年において、13%の生徒が高校のナショナルプログラムを受けるのに必要な要件を満たしていないが、補償教育プログラムの実施を通して、こうした生徒も高校のナショナルプログラムへ移行できるような配慮がなされている(本所：2016)。さらにスウェーデンでは、高校において障害や多様な発達困難をもつ子どもに特別教育プログラムを提供し、インクルーシブ教育の発展に寄与してきた。

以上の議論から本稿では、スウェーデンのゲーラナ県における総合制高校特別教育プログラム1校、特別高校2校の訪問調査(2016年2月実施)を通して、スウェーデンの高校教育におけるインクルーシブ教育の実際を検討する。

2. 総合制高校特別教育プログラムとインクルーシブ教育

スウェーデンの総合制高校(Gymnasieskola)は以前、大学準備教育を行う「ユムナーシウム」、多種多様な職業専門教育を行う「職業学校(yrkesskolor)」、大学準備教育と職業専門教育との中間的な性格をもつ「実科学校(fackskolan)」の三つに分岐していたが、1971年に統合され「すべての者のための一つの学校(en skola för alla)」として誕生した。それゆえに高校の中で多様な学びのプログラムが提供されている。2011年の高校教育改革により、表1のように、12種の職業プログラムと6種の大学準備プログラム、これらの入学要件を満たさない生徒のための5種のイントロダクションプログラムが設定された(本所：2016)。

表1のようにスウェーデンの高校教育においては多様な職業プログラムが提供されているが、それは専攻した職業分野に関する基礎知識と高度な教育訓練を受けるのに必要な基礎を与えるもの、すなわち生涯にわたる教育訓練の出発点と位置づけられており(両角：2012)、高校卒業後にまず就労してから大学に進学する者も少なくない。

スウェーデンでは若年者失業率や高校中退率の増加を背景に、2011年の高校改革では高校職業教育の質向上をめざして「徒弟教育(lärlingsutbildning: apprenticeship education)」が正規の高校教育として導入された(本所：2015)。徒弟教育とは実際に職場で学習を行う教育であり、職業系学科では15週間以上の職場実習が推奨されているが、徒弟教育は50週以上の学習を職場で行うもので、高校職業教育の質向上のために職場での学習が重視されている。

表1 2011年の高校教育改革で導入されたプログラム構成

職業プログラム	大学準備プログラム
児童・レクリエーション 建築・設備 電気・エネルギー 自動車・運輸 商業・経営 手工芸 ホテル・ツーリズム	経済 芸術 人文 自然科学 社会科学 技術
工業技術 自然資源活用 レストラン・食材 空調・湿度管理 福祉・介護	イントロダクションプログラム 準備教育 プログラムに準じた個人選択 職業イントロダクション 個人選択 言語イントロダクション

出典：本所恵 (2016), p.181

調査訪問したレクサンド高校はダーラナ県レクサンドコミュニティにある3年制の総合制高校(Gymnasieskola)であり、約800名の生徒が在籍し、9種類のナショナルプログラム・職業見習いプログラム・中等教育入門プログラム・特別教育プログラムが準備されていた(写真1, 写真2)。特別教育プログラムは他のプログラムよりも1年長い4年制であり、将来に向けて仕事・家庭・余暇に関する基礎的知識を学び、経験するプログラムである。

特別教育プログラムはリソースルームに近い形で行われていて、イントロダクションプログラムや関連するナショナルプログラムとの連携も強いので、特別教育プログラムにより個に応じた教育を受けながら、他のプログラムの授業を受けることもできる。特別教育プログラムでも他の職業プログラムと同様に職場実習を行うことができるが、実習期間が決められていないという点で他の職業プログラムと異なり、生徒個人の学習ニーズに応じて実習を行うか、学校で学習するかを柔軟に選択できる。

2016年2月の調査訪問時において6名の生徒が特別教育プログラムに参加していたが、ここではそのうちの3名の生徒の事例について検討する。

高校2年生の男子生徒Aさんは、1年次はホテル・レストラン・ベーカリープログラムで学んでいたが、本人の希望により、現在は工芸と生産プログラムで学んでいる。毎週水曜日には、スウェーデンハウスの部材を製造しているトーモクヒュースで実習を行っている。実習についてAさんは「トーモクヒュースで働いている叔父も一緒に行くので、実習に行くことに緊張はない。一緒に働いているおじさん達が冗談を言ったりして楽しい雰囲気なので、毎日でも働きたいと思っている。夏休みのアルバイトにも誘われているし、4年生になったら週3回実習ができるので楽しみにしている」と語っており、自ら選択したプログラムの中で楽しく実習を行っている様子が伺える。

高校2年生の女子生徒Bさんは、1年次より工芸と生産のプログラムで学び、現在はレクサンドの椅子製造を担う会社で毎週水曜日に実習を行っている。

高校1年生の女子生徒Cさんは、週に1日半、特別教育プログラム以外のプログラムでも授業を受けている。2年次から始まる実習について「不安はある。不安になったら、まず自分で落ち着く努力をする。それでも難しい時には先生に相談するようにしている」と語っており、社会的自立に向けて様々な課題と向き合っている様子が伺える。Cさんが参加しているホテル・レストラン・ベーカリープログラムでは、実習に行く準備として他の職業プログラムを受けている生徒と協力してレストランを開くこともある。学校の敷地内にあるレストラン「GÄSTIS」は一部の職業プログラムに参加する生徒が週2日程度運営する本格的なレストランであり、Cさんが指示を出しながら他の生徒と協力して調理をすることもある(写真3, 写真4)。

職場実習について特別教育プログラム担当の教師は「実習を受け入れるとその企業に対して国から補助金が出る。そのおかげで一緒に働く機会ができるのは、企業にも生徒にも良いこと。生徒ができる仕事はたくさんある。興味のある職種の中で簡単な仕事でも良いので、まず興味をもつこと、そしていろいろな職種を訪ねて、どのようなことができるのかを社会に示すことが大切」と語っており、職場実習を生徒の自立や社会参加につながる重要な機会ととらえている。



写真1 レクサンド高校外観



写真2 木工室



写真3 レストラン「GÄSTIS」の看板



写真4 レストラン「GÄSTIS」の内部

以上に検討したように、特別教育プログラムはリソースルームに近い形で生徒の発達と学習のニーズに合わせた支援を行いながら、インクルーシブ教育を行っている。生徒の発達と学習のニーズに合わせたインクルーシブな実践の特徴としては、①他のコースの授業を受講できること、②特別教育プログラム以外のプログラムを受講する生徒と協力して学習する機会が準備されていることなどが指摘できる。生徒の自立や社会参加をめざしていく支援の特徴としては、①通常の職業プログラムと同様の本格的な職業プログラムが複数提供されていること、②職業プログラムは本人の希望によって変更できること、③本人の希望により本人に合わせた期間で職場実習ができること等が挙げられる。

自分の将来や生き方・進路・職業選択を検討しながら、自立や社会参加をめざしていくことが重要な課題となる高校教育において、本人の意思を第一に、生徒の発達のニーズに合わせた選択肢を提供しながら、インクルーシブな教育支援を行っていくことが重要である。

3. 特別高校とインクルーシブ教育

特別高校（Gymnasiesärskola）は総合制高校に対応するものであり、知的障害生徒のための後期中等教育である。特別高校は就学年限が1年長い4年制であり、16歳から20歳を対象としており、21歳から23歳まで就学期間を延長することができる。特別高校の教育目的は生徒の発達に応じて学習を深め、人権として保障されている労働・生活・余暇を有意義にすることをめざすことにある。それゆえに職業訓練だけに特化した教育を実施するのではなく、生活や余暇活動の充実を含めた教育が行われている。

なおスウェーデンでは特別学校を通常学校と同じ敷地内に設置する「場の統合」の形態がとられているが、特別高校も総合制高校の敷地内に設置されることが多い。

特別高校では、①職業準備クラス、②個別プログラムとしての職業訓練、③個別プログラムとしての活動訓練が実施されている。個別プログラムとしての職業訓練では、一般労働市場への就労可能な生徒を対象としており、職業プログラムを中心に学ぶが、個別の教育プログラムを作成し、卒業後はサポート受けながら一般企業で働くことをめざす。

個別プログラムとしての活動訓練では、一般労働市場への就労困難な生徒（中重度の知的障害）を対象としており、卒業後はデイケアセンター等の活動に参加する。

3. 1 シュタインフック特別高校（Stiernhook Gymnasiesärskola）の取り組み

シュタインフック特別高校はシュタインフック高校の敷地内にあり、2016年2月の調査訪問時には5名の生徒が在籍していた（写真5）。シュタインフック特別高校では、ナショナルプログラムにもとづき電気・エネルギー、環境・自然、健康ケア、自動車・輸送等のコースを有しているが、芸術活動、スポーツと健康、家庭科、社会参加、コミュニケーション・言語等の個別プログラムも用意されている。

なかでもダーラナ地方の豊かな自然や農業・林業等の産業構造、就職先の状況をふまえ、環境・自然コース

と動物介在教育プログラムがシュタインフック高校とシュタインフック特別高校のカリキュラムのなかで特徴的なものとして位置づき、動物に関わる仕事を希望するコースと農場での栽培方法とトラクターの操縦方法を学ぶコースがある。シュタインフック特別高校ではとくに、自然や動物との関わりの中かで言語・数学・身体発達や職業訓練などを総合的に実施する「インクルーディング教育」を実施している。

またシュタインフック特別高校では学校独自の馬小屋と広大な馬術競技場があり、2名のインストラクターが配置されている。女子生徒Dさんはインストラクターの指導のもとで、乗馬訓練を始めとして餌食や体温計測を通じて馬のケアをするなど、一週間を通じて馬との関わりを大切にしている。エサの計量、日誌作成を通じて、馬のケアに関する技術だけでなく、文字や数概念の学習機会になることも示された(写真6)。例えばDさんはこれまで数概念も十分に理解することができていなかったが、大好きな馬に関わる教材や学習を通じて半年で数概念を理解できるようになり、彼女にとって初めて「数学」が能動的な意味を持つものになったという。その他、乗馬の際の身体バランスの訓練で、身体の調整機能の発達も示された。

男子生徒Eさんは、ふだんは注意転動のために歩き回ったりしてしまうために、車いすに乗って活動を焦点化しているが、乗馬の際には自分と相性の合う馬を探し出し、十分に活動を焦点化できていることが示された(写真7、写真8)。

3. 2 モーラ特別高校 (Mora Gymnasiesärskola) の取り組み

モーラ特別高校はモーラ高校の敷地内にあり、2016年2月の調査訪問時、在籍の知的障害生徒は15名、教



写真5 シュタインフック特別高校外観



写真6 馬の世話について学ぶ絵カード



写真7 鞍馬による活動の様子



写真8 鞍馬の台車とポニー

師は7名であった(写真9)。

モーラ特別高校の職業教育プログラムは自動車, 商業・経営, メディア, ホテル・レストラン, 福祉・介護等から構成されるが, 芸術活動・家庭科, スポーツと健康, 言語とコミュニケーションなどの個別プログラムも実施されており, 職業教育とともに日常生活や余暇活動の充実をはかるためのプログラムが準備されている。

参観した音楽・美術・演劇などの芸術活動の個別プログラムでは, 例えば音楽の授業ではギター・太鼓・ドラム・キーボード等のさまざまな楽器が揃っており, 生徒がすべての楽器を練習していた。ビデオ撮影して演奏を振り返るという取り組みも行っていた。また重度の肢体障害を有する生徒でも音楽活動に参加できるようにiPadを用いたり, 楽譜の理解が十分ではない生徒に対して, ギターのコード進行が分かりやすいように色分けされた楽譜を用いるなど(写真10), 個々の生徒の状況に応じて使いやすい道具の提供を行っている。

美術の授業において大切なこととして教師が指摘したのは, 生徒の興味をことばや行動から把握し, 彼らのモチベーションを高めることであると。例えば, 映画が好きな生徒はポスターの作成を行ったり, 展覧会に行った後に作品をまねて制作する機会を設けている。多くの生徒はモチーフを考えて描いたり, 造形することが難しいために, 画家の作品を模写することを通じて, 徐々に自分なりの解釈を行い, 伝えたいことを表現できるようにしている。ある生徒は絵画の模写を通じて, 自身の好きなアニメキャラクターを表現できるようになり, 結果として自分の興味を表現しながら, 画家の作品をデフォルメすることができたという(写真11)。



写真9 モーラ特別高校外観



写真10 音楽の授業で用いる色分けした楽譜

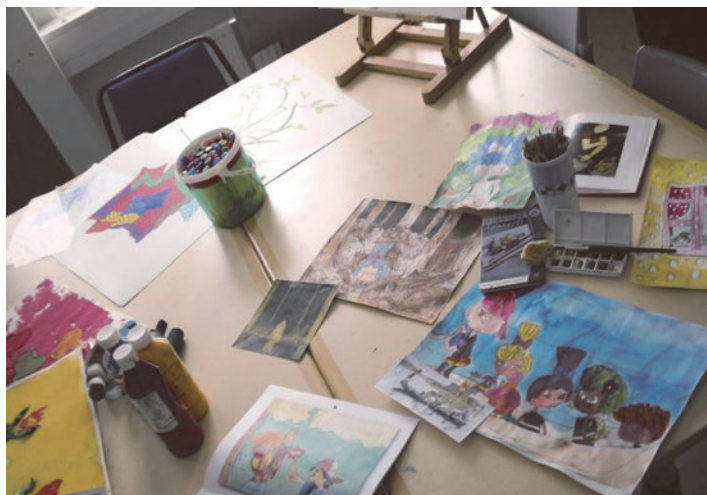


写真11 生徒が模写した絵画



写真12 平面構成のデザイン作成の例

4. おわりに

本稿では、スウェーデンのダーラナ県における総合制高校特別教育プログラム、特別高校の訪問調査を通して、スウェーデンの高校教育におけるインクルーシブ教育の実際を検討した。

スウェーデンの高校教育におけるインクルーシブ教育のポイントは、自分の将来や生き方・職業を検討しながら自立や社会参加をめざしていくことが重要な課題となる高校教育において、生徒本人の意思を第一にして、生徒の発達と学習のニーズに合わせた選択肢を提供しながら、多様な教育支援を行っていることである。

生徒の発達と学習のニーズに合わせたインクルーシブな実践の特徴としては、①他のコースの授業を受講できること、②特別教育プログラム以外のプログラムを受講する生徒と協力して学習する機会が準備されていることなどが指摘できる。

生徒の自立や社会参加をめざしていく支援の特徴としては、①通常の職業プログラムと同様の本格的な職業プログラムが複数提供されていること、②職業プログラムは本人の希望によって変更できること、③本人の希望により本人に合わせた期間で職場実習ができること等が挙げられる。

こうしたスウェーデンの高校教育におけるインクルーシブ教育の取り組みは、日本の高校の特別支援教育や「特別な教育課程」のあり方を検討する際にも、示唆に富んでいるといえる。

文 献

- 本所恵 (2015) スウェーデンの高校における徒弟教育の導入, 『技術・職業教育学研究室研究報告: 技術教育学の探求』第12巻, pp.10-18。
- 本所恵 (2016) 『スウェーデンにおける高校教育課程改革—専門性に結びついた共通性の模索—』新評論。
- 井上昌士・猪子秀太郎 (2012) スウェーデンにおける知的障害や発達障害のある人の学びの場, 『国立特別支援教育総合研究所ジャーナル』第1号, pp.49-53。
- Leif Roslund, Ingvar Sandling, Noriko Kurube and Satoru Takahashi (2003) Special Education and Inclusion for Children with Disabilities in Sweden; Its Ideas, Principle, History and Practice, 『東京学芸大学紀要』第54集 (第1部門・教育科学), pp.203-225。
- LEKSANDS KOMMUN Homepage : <http://www.leksand.se/Utbildning-och-barnomsorg/Leksands-gymnasium/>。
- 両角道代 (2012) スウェーデンにおける若年者雇用と職業能力開発—高等職業教育 (YH) を中心に—, 『日本労働研究雑誌』第619号, pp.51-63。
- 小野川文子・田部絢子・内藤千尋・高橋智 (2016) 子どもの「貧困」における多様な心身の発達困難と支援の課題, 『公衆衛生』第80巻7号, pp.475-479。
- Ramberg, S (2013) Special educational resources in the Swedish upper secondary school: total population survey, *European Journal of Special Needs Education*, 28 (4), pp.440-462。
- 宋在玉・崔在婉・田部絢子・竹本弥生・高橋智 (2014) 韓国の高校に設置された特殊学級の現状と課題, 『東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ』第65集, pp.147-156。
- Swedish National Agency for Education (2016) Curriculum for the upper secondary school.
- 高橋智・田部絢子 (2009) 高校特別支援教育の動向と課題—発達障害生徒の高校教育保障を中心に—, 『障害者問題研究』第36巻4号, pp.242-253。
- 高橋智 (2017a) 高校における発達障害等の発達困難を有する生徒の支援, 『教育と医学』第65巻2号, pp.40-47。
- 高橋智 (2017b) 発達障害等の発達困難」の卒業生調査から見た高校の特別支援教育の課題, 『月刊高校教育』第50巻7号, pp.32-35。
- 竹本弥生・田部絢子・高橋智 (2012) 発達に困難を抱える高校生が求める「自立・就労・社会参加」の支援—公立高校と特別支援学校高等部分教室に在籍する生徒への調査から—, 『発達』第129号, pp.18-25。
- 竹本弥生・安田佳世・高橋智 (2014) 「課題校」と称される公立高校における配慮を要する生徒の発達支援と「特親クラス」の実践—すべての生徒の学びと中退ゼロをめざして— 『東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ』第65集, pp.133-146。
- 竹本弥生・青野路子・三枝あゆみ・田部絢子・内藤千尋・高橋智 (2016) 「多様な困難を抱える高校」における特別支援教育の課題—卒業生・保護者・教師の面接法調査を通して—, 『東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ』第67集, pp.69-79。

スウェーデンの高校教育とインクルーシブ教育

—— ダーラナ県の総合制高校特別教育プログラム・特別高校の調査から ——

Upper Secondary Education and Inclusive Education in Sweden:

From Survey on Special Education Program of Comprehensive High School and Special High School for Students with Intellectual Disabilities in Darlana, a Province of Sweden

高橋 智*¹・田部 絢子*²・石川 衣紀*³・内藤 千尋*⁴
石井 智也*⁵・能田 昂*⁶・柴田 真緒*⁷

Satoru TAKAHASHI, Ayako TABE, Izumi ISHIKAWA, Chihiro NAITOH,
Tomoya ISHII, Subaru NOHDA and Mao SHIBATA

特別ニーズ教育分野

Abstract

The purpose of this study was to clarify the actual situation of inclusive education at the upper secondary education in Sweden. This survey was consists of visiting to special education program in comprehensive high school and special high school for students with intellectual disabilities in Darlana, a province of Sweden.

The most important thing of inclusive education at the upper secondary education in Sweden was to provide divers educational care and choices along the needs and development of students individually. Because it is important to try for self-reliance and public participation while considering own future, way of life and vocation in the period of upper secondary education.

The characteristics of inclusive practice along the needs and development of students individually are as follows: the capability of taking a lesson of other course; the capability of cooperative learning with students attending other than special education program.

The characteristics of the care to try for self-reliance and public participation are as follows: multiple full-fledged vocational programs similar to ordinary vocational programs are provided; the vocational program can be changed according to the wishes of the students; allowing workplace training at a period that matches students themselves according to students' wishes and so on.

Such the inclusive education at the upper secondary education in Sweden is suggestive in case of discussion on special

*1 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

*2 Osaka University of Health and Sport Sciences (1-1 Asashirodai, Kumatori-cho, Sennan-gun, Osaka, 590-0496, Japan)

*3 Nagasaki University (1-14 Bunkyo-machi, Nagasaki-shi, Nagasaki, 852-8521, Japan)

*4 Matsumoto University (2095-1 Niimura, Matsumoto-shi, Nagano, 390-1295, Japan) / United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

*5 Nihon Fukushi University (Okuda, Mihama-cho, Chita-gun, Aichi, 470-3295, Japan) / United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

*6 Shiraume Gakuen University (1-830 Ogawa-machi, Kodaira-shi, Tokyo, 187-8570, Japan) / United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

*7 Saitama Prefectural Tokorozawa School for Special Needs Education (1-1802-7 Nakatomiminami, Tokorozawa-shi, Saitama, 359-0003, Japan) / Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

needs education at the upper secondary education and “special education program” in Japan.

Keywords: Sweden, Upper Secondary Education, Inclusive Education, Comprehensive High School, Special Education Program, Special High School for Students with Intellectual Disabilities

Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 本稿では、スウェーデンのダーラナ県における総合制高校特別教育プログラム、特別高校の訪問調査を通して、スウェーデンの高校教育におけるインクルーシブ教育の実際を検討した。

スウェーデンの高校教育におけるインクルーシブ教育のポイントは、自分の将来や生き方・職業を検討しながら自立や社会参加をめざしていくことが重要な課題となる高校教育において、生徒本人の意思を第一にして、生徒の発達と学習のニーズに合わせた選択肢を提供しながら、多様な教育支援を行っていることである。

生徒の発達と学習のニーズに合わせたインクルーシブな実践の特徴としては、①他のコースの授業を受講できること、②特別教育プログラム以外のプログラムを受講する生徒と協力して学習する機会が準備されていることなどが指摘できる。

生徒の自立や社会参加をめざしていく支援の特徴としては、①通常の職業プログラムと同様の本格的な職業プログラムが複数提供されていること、②職業プログラムは本人の希望によって変更できること、③本人の希望により本人に合わせた期間で職場実習ができること等が挙げられる。

こうしたスウェーデンの高校教育におけるインクルーシブ教育の取り組みは、日本の高校の特別支援教育や「特別な教育課程」のあり方を検討する際にも、示唆に富んでいるといえる。

キーワード: スウェーデン, 高校教育, インクルーシブ教育, 総合制高校, 特別教育プログラム, 特別高校